

友常勉さん資料

2017/01/22 「オリンピック災害おことわり」 Read in Speak

審査文化、災害イノベーション、共謀罪

友常勉（東京外国語大学）

フィル・コーエン「ありがとう、でももう結構——オリンピック協約の贈与と負債」『反東京オリンピック宣言』（航思社 2016 年）205 - 209 頁

「真理の効果——オリンピックの審査文化へのノート

二〇一二年のロンドン大会を「レガシーの大会」として強調することによるひとつの帰結が、イーストロンドンとロンドン全体、そしてイギリス全体の社会に与えた即自的な、そして長期的な効果を評価するにあたって、その大きな評価手段が構築されたということである。オリンピックというのが重要かつまた費用のかかる事業であるために、このような審査文化がどのように機能するのか、これは時間をとって考察するに値する。」〔中略〕

「生物統計学、人類統計学、心理統計学、社会統計学、地理学、歴史統計学など、これらの統計手法が、規律化、あるいは整序された努力を要するものとみなされた身体、つまり労働する身体、軍事的な身体、市民的な身体、子どもの身体、そしてとりわけ「アスリート」の身体、こういったものへ適用されるなかで発展してきたことは、偶然ではないⁱⁱ。それぞれの規律によって特殊化された条件のもとで、多様な形で体现された人間の行動を把握するために発展したこれらの様々な技術には、共有されていることが一つある。つまりそれらは、数量化可能な「パフォーマンス」の指標である共通性のなかへと集約される標準化された評価手段の枠組みを形成しているということである。身体が検査をうけ、比較され、そして判定を受けること、そしてその身体の能率性／あるいは有効性といった点から様々な価値が付されることを可能にしたのが、計測機器によって生み出されたこのパフォーマンス [遂行性] という原則であるⁱⁱⁱ。計測法は統治の監視システムにとって中核的なものとなり、新たな、そしてそこにおいて演劇的かつ官僚主義的な秩序が生まれた、大衆の監視体制を供給しているのである。つまり、演劇的な演出／可視的な展示として、かつ測定可能な生産／結果としてのパフォーマンスが、単一の管理装置へと統合されたのである^{iv}。

この新しい評価システムが、かつてよりも正確な成功と失敗に関する水準の構築を可能にしたのである。つまりパフォーマンスにおける些細な違いも、成功と失敗の境界を引くには十分なものとなっているのだ。またこのシステムは、それが究極的な価値に関する評価判定を遮断したとたん、全く異なっている一連の実践すべてを、同一の基準に基づく計算対象として検査し、取り扱うことを可能にした。その代わりに価値を置かれるようになったのは、検査対象に関して何かを明らかにするための試験そのものである。マリリン・ストラザーンが指摘したように、「出来事に関するレポートは、それ自身が産出している価値形態に基づいている」^v。彼女はこのことをオートポイエーシスの即自性——ある閉鎖系の自己作動の合理性を創出する方法——であると定義した。要するに評価プロセスは自身の自己言及的で内生的な到達規範を設定するのである。審査が評価するのは、被験



友常勉さん資料

2017/01/22 「オリンピック災害おことわり」 Read in Speak

者における、審査という検査に付されるべき能力である。

この過程は、二〇一二年のロンドンオリンピックに導入された評価の公式枠組みにおいて明確に機能している。「論理的連鎖＝ロジックチェーン」という概念が、大会に導入された枠組みが確立しようとする方法論的な要綱の中心である」〔中略〕

「オリンピックの審査はその効果という観念に関連して組織される。効果を受けるのは誰なのだろうか。効果が感じられるのはどこにおいてか。いつ効果が知覚されるのか。これは、二〇一二年の大会に関する評価が繰り返している調査上の問題の三位一体である。効果の研究〔インパクトスタディ〕は、単線的な因果関係のモデルを用いて実施され、対象となる住民への作用の干渉という効果を図るものとされている。そうした住民間の相互行為が、作用それ自身にあたえる効果が考慮されることはほとんどない。そのような研究は、オリンピックという文脈においては、本質的な物語は大会が開催地の共同体をどのように変えたかであって、共同体自身が大会をどう変えたかではない、という思考法にもとづいているのである。完全に内在的な、行為主体性の自己言及的な原動力を形成するにあたり、効果研究は人間という行為主体者を単なる人形として、受容者である共同体を、政府の目標や目的の実現に対して、自身の自律的な行為主体性をなんら持たない、受動的な支持者か反対者に切り縮めてしまっている。

効果測定を原動力とする審査は、「抜け目のない」政治家や政策立案者、スポーツ関連当局にもっとも大きな影響を持つ、複製可能で規模の大きい統計学的手続きについての説明に関する確かな言説である。つまり、審査によって客観的かつ信用性を持っているかのような外見が付与されるということだ^{vi}。審査することによって、ある大会と他の大会との共通の達成指標を通じた比較が可能となる。つまり、過去のオリンピック大会の一望的な調査が、適切な「オリンピアン」にもとづいて、つまりはグローバルな視野をもって展開されうようになった^{vii}。ここにおいて卓越的になってきているのは、公衆の行動を規制し修正するべく作られた、社会的干渉プログラムの計測的な観察に努力してきた法科学が、公衆の印象操作の過程における知識をどのように運用すべきかという技術である^{viii}」

災害イノベーション——福島・「イノベーション・コースト構想」

「昨年6月（2013年）にとりまとめられたイノベーション・コースト構想は、福島浜通りを中心とする地域の地域経済の復興のため、オリンピック・パラリンピックが開催され、世界がこの地域の再生に注目する機会となる2020年を当面の目標に、廃炉の研究拠点、ロボットの研究・実証拠点などの新たな研究・産業拠点を整備することで、世界に誇れる新技術や新産業を創出し、イノベーションによる産業基盤の再構築を目指すとともに、これらを通じて、帰還する住民に加え、新たな住民のコミュニティへの参画も進めることにより、地域の歴史や文化も継承しながら、魅力あふれる地域再生を大胆に実現していくことを目指すもの（具体的には以下の4項目からなる——「福島浜通りロボット実証区域」「放射性



友常勉さん資料

2017/01/22 「オリンピック災害おことわり」 Read in Speak

物質分析・研究施設」「モックアップ試験施設」「廃炉国際共同研究センター国際共同研究棟) なお、以下のような南相馬市海岸での実験成果も広報されている。「福島県において、世界初・完全自律制御飛行のドローンによる長距離荷物配送に成功しました！」(2017年1月12日、福島県広報)

<http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/121094.pdf>

-
- i 審査文化の批判に関しては、M.Strathern (ed.), *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics and the Academy* (Routledge, London 2000)に収録されている論文を参照。
 - ii 身体動作に関する美学的、科学的研究がどのように集積しているのかということについて、R. Solnit, *Motion Studies* (Bloomsbury Publishing PLC 2004)を参照。また、M. Budd, *The Sculpture Machine: Physical Culture and Body Politics in the Age of Empire* (Macmillan, Houndmills, 1997)も参照されたい。現代の「ボディポリティクス」批判としては、A. Heller and S. Riekmann (eds.), *Biopolitics: the politics of the body, race and nature* (Avebury, Aldershot, 1996)、および E. Cherniavski, *Incorporations: Race, Nation and the Body Politics of Capitalism* (University of Minnesota Press, 2006)を参照。
 - iii A. Rabinbach, *The Human Motor: Energy, Fatigue and the Rise of Modernity*, University of California Press, 1992.
 - iv 監視、計測技術と、資本主義的近代という体制のような統治技術との関係についての議論は J. クレーリー『観察者の系譜—視覚空間の変容とモダニティ』(遠藤友巳訳、以文社、2005年)を参照。
 - v M. Strathern, *Audit Culture*, op cit, p22.
 - vi 効果研究にはひとつのアイロニーがある。外来的な効果計測の頑丈なイメージを持ち合わせ、オートポイエーシスを評価するための選択の方法論であるべきという事実、そして私たちの生を、地域共同体が大規模な再開発に対して身を守ることができるようにするエンパワーメントの手段として生活を見るというアプローチ。そしてそれが現在、地域再生担当当局が対立を処理し、同意を得る主要な術となるべきだということ、である。J. Obligliato, *From Community Empowerment to Conflict Management: A Short History of Impact Studies*, Gower 2005 を参照。
 - vii H. Preuss, *Staging the Olympics*, op cit; J.R. Gold and M.M. Gold, *Olympic Cities*, op cit; H. Hiller, 'Toward a Science of Olympic Outcomes', op cit; M. Dyreson and J.A. Mangan, *Olympic Legacies*, op cit; M. Smith, *When the Games Come to Town*, op cit.
 - viii たとえば、*The Olympic Games Impact Study London 2012 Pre Games Report* (ESRC 2010)を参照。この公式な IOC 研究の次の報告は 2015 年ということになっている。

